東牖子

五

洋学文庫
文庫8
C 242
5

東牖子巻之五

月令に云、腐艸化して螢となる、汚水化して蚊となる、
こゝろの水の汚濁化して魔となる、
女子の芳根と頼改れば亡魂となる、
○士の妻女称して御新造といへるいわれを世人義ありてしゝび
御深窓と云ゞ、と云ふ、
よ對して称とるふべし本朝の侍の妻人持衆深窓に秘蔵
屋敷に長根欲の楊家の深窓に生まれて何をみを
御深窓と書ゞ佐なるべし秋林用語の新般の須野にて

陸氏ぶ傾城の新渡の煙草を云葉

○紙を次ぎ次ぎ次ぎ次の二字を書らぶ云葉

也を次と云中と云葉を中略を中略と赤猫を

あてこと云へるを力ホの反てこと云ふ法反り

を次と云を次の切を足ぶの法切り反切り

又中と云を中と云葉を中と云れ枝を出ぶ飛ぶを

中と云へ上の中へ沖を下へ羽を舟を先ぶ用を後のとるへ切の

法なり又用を先ぶ沖を後のとるへ切の清を法を濁濁を清を云

小同是賢賢易色と論語を出るものを中の字例ぶ

ぶ一必を云なるべし次初童るどのは紙の紙と云ふを

濁ふるべし次上のは紙へ用を下の紙へ清を初冠ぶるり是を

笑を濁云なるべし　紙屋の売うぶ書ふ書へ堂ふ出て家を入ぶ濁を

〜云ふを〜〜云へるへ堂ふ出て家を入ぶ濁を

此義果〜〜英雄人を歌濁ぶり枝音へ我用を大庫平ぶなり

西國を去ぶて東國を去ぶて東國を去ぶなり音に甲乙ありて云

語へ美濃の美利ぶ〜全音を水土ぶなり〜語を智器の濁者

○東都のか年紙初の高ふ酒者を設るを紙者住味数多

ぶ〜ふ〜を富佑の解を云ふの事ふ〜を事の後枝を富ぶ事

ぶ〜を〜〜ふり枝ぶて充人ぶ事を遣ひ〜ふ〜ける後益

歳京店の女の逸物や〜を頻を充ぶ京金を狂忍の業〜

えかしたり

○さらバ是有しだこうの極るを是有ゆふなり又去ることハ或方なり云人を或人なりおりをとうとしと云アカサタの横訛よて今筑紫の俗先行をいへる言ハ海じて云ハ是へる

○夜なだとえるし長夜の此奴僕として盃の仕業をあさし是諸工人とも諸工を称じ傭夫によなふとかれハ鍋をとりて物を煮て食ふ終る夜鍋と云し年浪等に出せり云蓼説なる夜なだハ夜延の転せし之盃を夜へ延く緩皆を補ひハ夜延なるべし

○まんざるを瑕之ひよんなしるを変なることうずしひと

極いかりまこいを金之なぜに衍字之仙文さと足さハ仙文と云足云なり又云貴なるしたるもの

○老楽と湯桶訓に書しその見苦しそれ老らくを漫に老矣と書てらくとしてりしき唯おひさりと云意なり脱からくを恨らくへおなじく云にわたるしに亦美ずして文字楽の字は誤なし

○俗間に腕をたゞさしいえり闘諍のしれおなじ腕を摑をたゞさしらしくりいゝく腕をたゞさし迎り手しれ腕を摑むひとは首を又捕てもあるは手房をとるをいふなりたゞさとは首なつて乳房に対して手房なりといふを

ものとれたなさうけるまてふうしみよの俳よ花たてまつり

○白うるとれうるとしを云字を麗かるべし　ちろく羅しを云

糸かり麗をうるうしを云へるを緩とゆるり糸をまるり線を

ぼるりるるをめるりうふたぶじるふをのてをを海を

○鮫肉の云葉より下賤の者の来りしを云ヨジヤレしを云ぶ者の粥

ぜしをとをゴザレしを云ぶ者の粥ぜしを物をろへよ

タモレしを云ぶるとより下賤貴族しいるふど中し敬るて

洟ぶ角しるるど耳なれる友さのを卑の孔する族よ

おとらぶ却るをまをナクレを贈かりホシイを欲を鮫肉ハを

治を孔雑かりかて京拵ハ他方混じて野かるをを

○唐音より美快かるをを好ハウしを云ようしぶるをを不ぶ

ハウしを云を咎て洋しをとるを孫をしを須卑猿より

仕換ぜしををボハしを浪花よりてをボハしを京都を京の

猿茶屋の浸浩よりをとハグしを云わしをとブハイしを皆

好不好の粥浩かるべし

○糊を孫まりかを孫まの及しを十二又より迷ぶ

ての也放よのをを云を孫多れ粥ぜしかり粥ぶて粘る

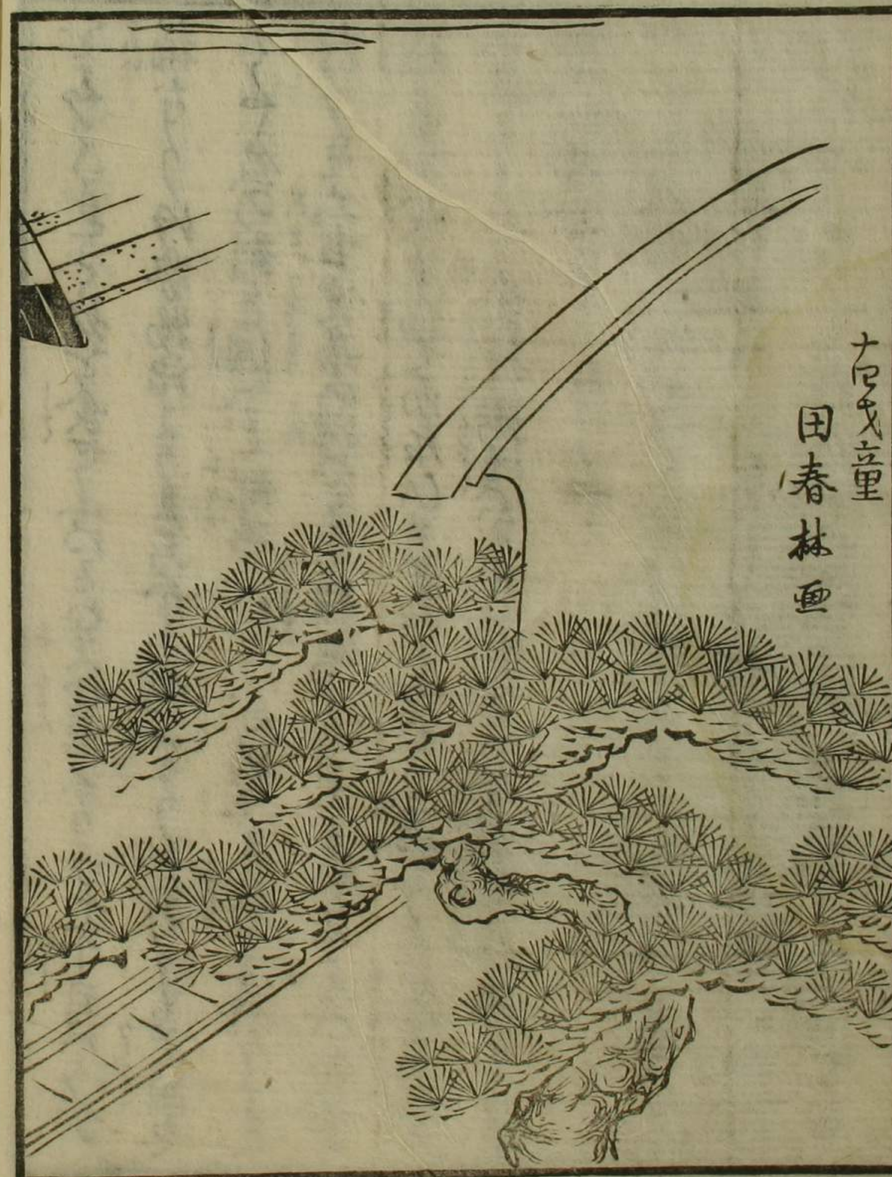
をのハみかるのりをハるるべし　俳笑のり貴海苔も海の

孫まり血をのりを云を孫の孫まりかり京都りて夜

分糊糠糊を賞より孫のどくのりを糸をを云を夢ぶ

ひわのりこと云ハ兆茶兆飯ハ
飯のしる湯ゐどをつかする
衣よ加へのりなるもだひ色を粥ともゐ飯ともゐ定色ゐ
粥の制肴ハ今と変るべし　南都の俗若粥揚菜ゐ
しふ用ゐるとの粥と下濃て濃うなるとの糒糅なるべ
いぢと暦の糒糅てゐ粥の食てゐ色ゐ件古常
の勢ゐに粥を食ゐ　や源氏物語よ粥を古てゐ
枕双紙よ粥の節供ゐ　ゐと古て　ゐ
変ゐ　ゐ　或云大古ゐ
兵粮よ　ゐ飯ゐ　ゐ今の軍防令よ糒を賜ゐ分量

とゐ　ゐ飯を食せ　ゐ官ゐ　ゐ下司ハみゐ
糒なり　ゐ物語　ゐ　ゐ國ゐ
　や飯の制を綱へど鄙　いまゐ綱ゐ紙ゐ
たゐ大古完居の深ハ　ゐ雑炊ゐ　ゐ元旦よ
雑羹ゐ食ゐ　初て而后ひ色ゐ　ゐ清ゐ元旦粥を
合せゐ　や竟拜粥　ゐ　ゐ
笑出ゐ　ゐ
○世俗燭の屁を灰く半ハ孫ゐ　ゐ年ハ番ゐ
　ゐ遊歴中田家ゐ居を下ゐ頂ゐ瓶ゐ　ゐ夜ゐ唯提
灯のゐ　ゐ　ゐ数度有て困ゐ　ゐ或人教て曰



十二月戈童
田春林画

らうそくの屑を吹だしと扱ま後に試よらうそくの屑を
吹くゝよ再び弥狐てれてしたるうもひろし夫弥狐を人乃
息のかゝつてる物を喰ひ人の食ひ餘りの物を食ものを
半ゝ故よ彩のごゝ夜乃燒燭の屑を吹ぶるゝ
○和歌の題を出た半ゝ題をたしてゝ誓古のあれと題を
師よもつぐ詠まれたりし扱よ師よりゝ自己の才を以く
神ゝとゝ乃人れ方を直よ直るくなり扱ま沙よゝて出題
御免とゝ人ゝゝと至る独ゝ初雅のゝゝ
半百の今まで知る人の用よ出題ゝゝゝ和州の
勝間寺良のゝたり容易の屑よ扱ゝいゝるもべ洲猶ふい

題ふと師ゝ紀とのを題ゝ
扱ゝてを風雅の道るゝゝや風雅の歌れ
酒蔵を風雅ゝのゝ乃俳ゝふゝ
八正也ゝゝゝゝゝ道を立ゝ人やゝれ芭蕉の古
墳行州上野て古ゝ塚ゝゝるゝ文芭者の建ゝ
法師の墓ゝ法ゝゝ反ゝ桃者
歌を賜ゝゝゝゝ道よゝ法師ゝ有よ俳諧の歌の
号をゝゝ辞せゝゝや幾紀の者北下の
是雅ゝゝ西ゝ扱字通ゝ
むゝゝ孫ゝゝゝのゝゝ風雅の道よ
ゝ北下よゝ

徒然草の宗匠たる人なりとも云べし誹諧において点者たりし人のそのまゝ私に宗匠と称するハ僭倫の甚しきの至

○此頃流行の誹諧を見るに虚実の扱ひ頗る疎し実中の実に落て唯云分縺の面白からんことをのミひとへに云ふ事ぞ多く媚するをよしとなり虚実と云ハ先易の文に初と云て終と云ハ次上と云て下と云ハ次乾の初九上九潜竜より亢竜の有悔ニ飲酒中也虚をよみ実を説とり老荘の寓言と勿論なることハ云迄もなく佩刀といふもの柄頭小尻と云て尾と首とあるに小尻より出るを実と帽子迄を頭と云ハ此ふまへて云ふ本末表裏ニ虚実あり是を手の尻背ハ脊尻なり足ニ頭背ハ膝頭なりと云

自然の虚実あれバなし李白が詩に白髪三千丈とあるハいかにしても長すぎたる白髪なり故に虚と云て縁愁似個長と実を添へ和歌にハ古今集の初春に来りしと云て鶯乃声もたゝぬと虚実をよみ伊勢物語に源氏其外其の後が弐拾年にてありし人名があらし実と虚実の工風感ると云ぬ処ハ云ハずとも古今や唐詩の上の歌を探るにとかく是と詩にも芳野の花を雪と見雲とも読人ありしなれバ是れど猶田の桃を火よもを見るべし誠や道に実ぞなりの立がたきハ風雅の骨髄なるをや余々なる約束の差ざるハ嫌しけれど首尾ある根の解がたき清らし計の小くて池へ実と船の大く

深むは虚なりとは虚実とよく分別せず十論は確云ものなり

確云　こ條の檔うは虚なりとて深こころか

門　大蓼やかうは崩邑　檔のこと

是は二條の檔を崩檔うは一條を大蓼よりたるとかりうは如ども

寂しきところをしきところを西これを延が骨稜をやはる延を

たりうがるを打聽よ行しやすやを大蓼のるを物有をふるゆるはは

風流の道具をはるべきよりは順條点をうるべたを汐をふる

るるこ拙きたるこるるとでは下よる強者のを舞妓の稽古るると

初日を月るるこの遠を必変不汐着と森蓋衣裳とうるをする

まだなり定家卿を寂しくを業じをれるものこゆるをふめ

でをくを深ぐうは漉るこるゆるるる延も業べうをを

花月をんとよをかひ車をうるる樣よむをてあをふをるる人

しるを宜へをとうや扱るるの実よのをかりうるこ

泥潜　道ぐをこの木槿を馬小舎ひるるる

実　道ぐをこの木槿を馬の舎よりる

初のるをよ小茶印をりを激烈の域をり古今を絶倒せし

るなり後のるは実を為て唯こなり今や流汐しをよ小茶も定

うるれ切字なるうの下よ後者のをを着を板かるもるべうり

行ををもあるを純流うを実端の板よいども東花坊が古今抄十

海かどはるるをするべうををるをせて人を祖沢寥あり

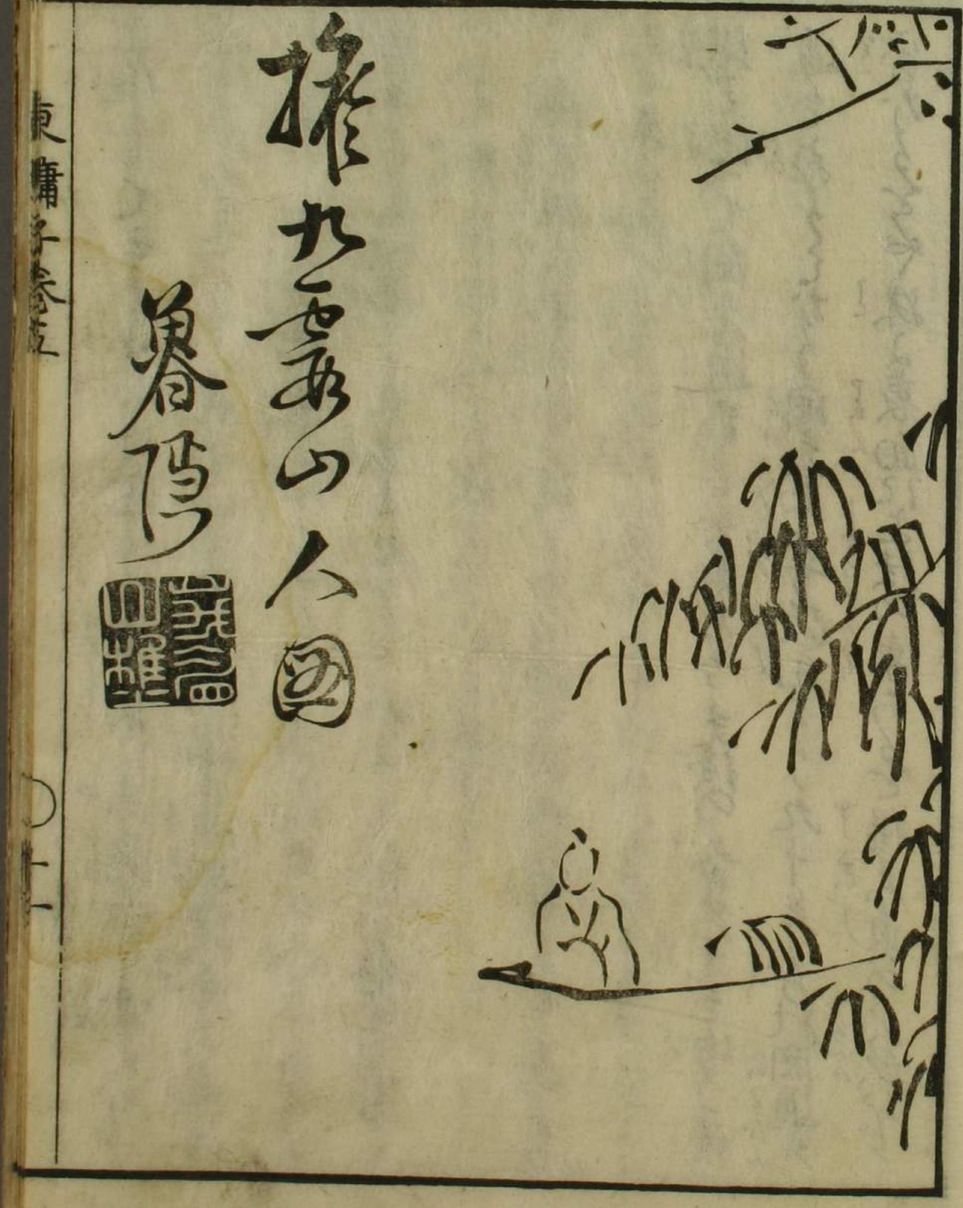
そもそも海の中に一字緣茶法禪白る經六經と云部の泌書と行ふ実と夫と部したる物ふるしと二代目の名元坂ぐ云亟しうしうとあくだ仍書かるべしとや

○常人伏して寢るをの病と長病伏を病をのい生くこと云こと相法の書して月番しぐ他年病者を試るに十人を義ぐ考月々変たり盤書して他ぐして相書して月番り一事仍変を通る形るを部ぐも相法の書い元来素龍より完所を定免部法肯拾てしよかぐ事多くある

○鶺鴒を越の國と舞るて花を源く慕ふ名て故に我名南枝巣胡馬北風嘶と作るとかの鶺鴒こ

のこと巣を作るぐぬく鶺鴒と化卿小月巣は唐渭韓魏燕赤の間ぐこて南よさしたる枝に巣をて枝を慕こと自然し海紀名ふと依る羈旅に故卿を思ふ作こと肯ぐさそのを唐海の越中懐古に唯有鶺鴒花と云しい南越の名なしぐこと鶺鴒小寂寥たるこのこと作る常るぐしぐを越なる事と自然こてること海人茅を鶺鴒菜こと云南海のこふ生こる物ぐる紋に知るも蓴鹿熊掌両所ぐ出ぐること性の天に変ぐる文逗だぐこぐ行こ

○雛妓初て人に寢とこ水上こつを世事淡こ云こと商賈の義物を船ぐ同丸へ初て上ぐを水上こ云


雅九雲山人
春雨

よ准じて云ふ事なり然れども万葉に未通女と書ていまだ
人のまゝなるを婦といへど初て揚る雛妓少く全未通揚
なるべし扨揚屋を挙屋と手ごろなるべきを君よくをもひしるを
薦挙と云吹挙と云客に妓をとゝみるを拵ごなるとも
いへど挙事なるべし水上のことも拙さを
○唐大但武德年中に綾る文の綾を開通元寶とそのち
九十年を経て玄宗の頃小開元と云年号をとりたり故に
綾を絞て開元通宝と云其ゆへ文字に元を也り綾
通を略して開元通宝なり開元年号改元より九十年ゝ開通元
宝なるをや殊に裏面に上弦の象あるを揚大真の仇形なるべく

いうるを金要須なるべし
○羅貫中が三國志演義を譯して通俗三國志と世に流布
の中に小呉の國に魏の張遼を水少なるも恐怖る小兒を
驚ろかを遼来るといふ故に小船を多
くとゝのへ此事を譯せる人は會稽の王
ロ〳〵と呂律くれ物ぜしかり金嬰兒をして開合爽
なあんとて呂律くといふ事なるを京者の當後に云者の
鮮世ふらざるをロツゲ迎てあんとて呂律ばかりとも
○後にすりと菱花とて地の小菱のことなるかと〳〵と
造り初ものに故小八花形に造りと或張よいつとも乃

八花敷とゝ云ふ初は圖せ〜鬼門の象〇これを神号者流は
いろ〳〵ものや詳せど又或説は蓮花を唐土の半かうかの
仕方より皆圓徳とゝいふ〻海抄別今宮の社の什物乃
徳と蓮花の真徳なり裏面は紙筆にて大吉の絶品と見
えてゝ字にてなれど和徳なり書風奈良七代の頃とおぼしき乃
〇京師東の京極通拾遺預寺八浄土宗のかしらにして名号
毛日仏佛の作の大佛と此寺門のおよみとう〜餓を貴家有
大仏餅とて珍らしき品なり富貴方の紋とふるき後
巻と大岡為東六波羅の南は方廣寺大仏を建立せしが故まこ
利の餅屋大仏餅とて新は名をかへて鳳昌連餅なり

京極通の初は餅屋の業を変拾預寺通柳ゝ場と云延狩宅
しの孫自侍と大の者を募りて日萬の紋を賣し
酒〻落〻たる風流家にて傾城禁短ゝと云物を置自笑よ
あるゝ八文字屋本に京師の書林なり実は烟花の一絶なりて大仏餅と云ふ元来
拾預寺大仏の門ならんとゝや此餅屋は法名和尚と云
表徳は其頃とい〻と
〇和州那山の池田に武と云人と貞門の跳人にて七よなり
ゝ時代と古風〻〻て酒落〻〻ゝ多は軽口勢せ〻会
勧仕の才と酒とふ花とうるゝ件ゝ慷慨して
そゞふ者くるあやまりものゝ先

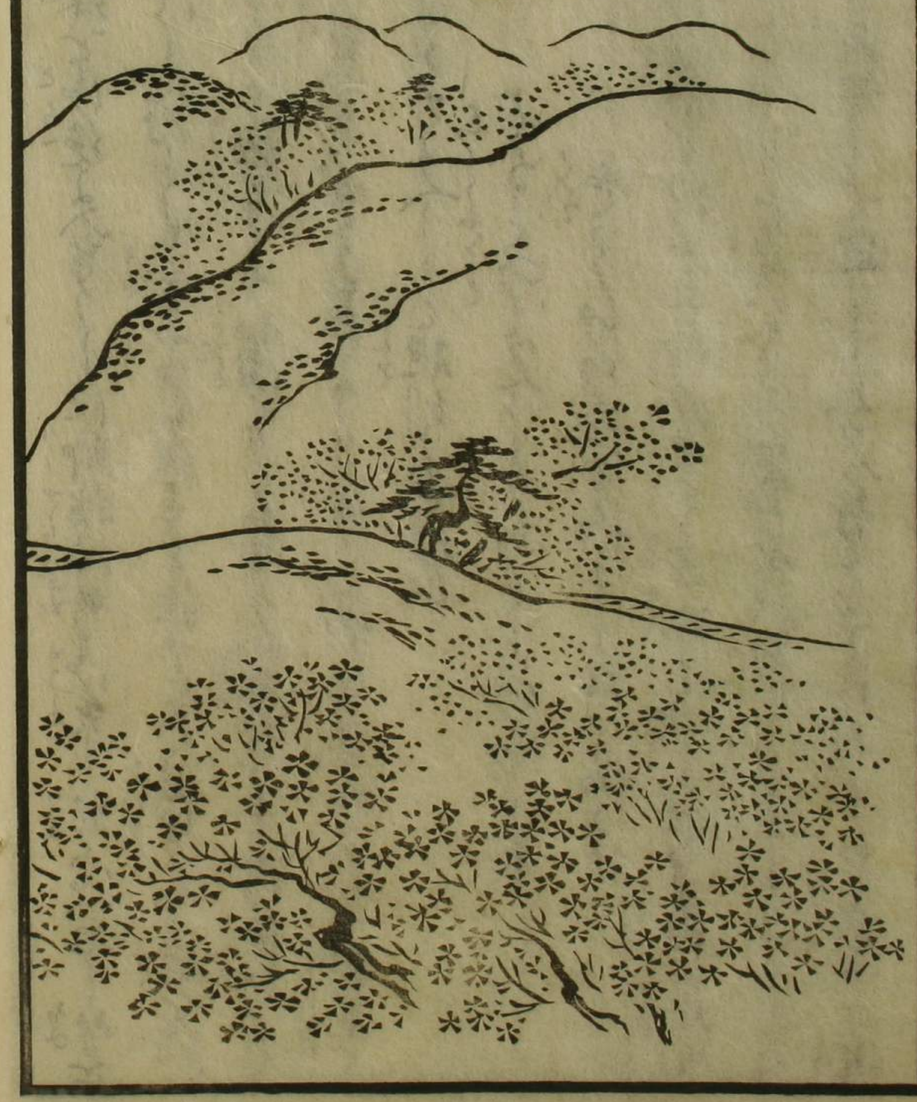
生涯を仕く反よ去年の冬より逆しく去年くしてすのまを
いとゆ行りりり美より去師へまりて家を見十分の校と
よりてみちの程を稽て帰るを年よ悦び思ひ方を不さる
あしらの去師まちく家ありて人さるかこりてしは
しるん実よ風雅の濃りしやや此正式月分合二百者ありみる
程分かり月分作を者して年群実桜布畑田造弐人とせり
牲分八百者とへる校年よありしのか程分ハたをしりしが
校年ふをしるし今世東彩の程分者流の後去の程者を見ホ
を授しせしや
○天と天公工の分しるる童僕を去ハよ保年施しを衣食を

立家より為へよ者を世の業と教へ教ゆくの世程を出て
こしよ去秋両度を行よ新衣とりて信者そをしを衣物をよ
永除をを去者を失せゆ去れ去家の新衣を保年施しへを
○かべての貧者を極者をしく毎を已を者ゆ世ををゆ
極者を行程を外者を極しりを校よ知りへを是程大かるる後を
ゆし極者を者しゆ者ハ却るたゆをりを果を知るへ今月
を風雨弱しをて不出勤をしりゆ岐晴の英月ゆをゆを私
の潛りをみひゆを貧家の者しへを長閑るる日をけ寺
級下を拾銭しよ求先れ後世のあふゆく勿化冥慢ゆの
世活へしふをて濃ををりを毎しを去森西のしをを業を

廢し七月日を空しくとゞむる財を儲け其却る費は材
出への差ひゐ分の事なり貧家の奢と沙汰なりし或方
言を行しりや殊に秀れ秀たる町家のもどきくだれ
技術あり其清き人を是を本師祖しいえり宜しく人を絶せり
○和州之藩の布袋屋某と同國並松の周敬子の門人なり
年頃わかとたしこ或とし(年)の暮
せかとのこすし蘇のかてきこしのあみましのつ山
と縁の添削をえし小師をよろこびとはの秀作ふをと称
誉とと己と文詠ゆるとのもと太によろこび折からると味を
誇し小式とれ京師にのぼる侍に冷泉為村の卿に消息りて

自詠を御覧に入奉りしに卿稍御感ありて宜く秋の梅し貴き
折ほとんど絶むも言ばかり既にうたひあげて彼男大に肝を消
きびしく聴せしが御消てやよき小恐ながら御添削を
乞下せ給ふこともなりやとまうしければ卿宜く
いふもまたなる事ととて硯引よせ給ひ
よろこびの…
宜しけのかるみよし師しかり
と添削し給ひて是を方詠して之を悉皆のもと
向ひしを虚かけし家がなれ脈なりしとて折も
彼男感慨して退しふかく首をさりたるは鳥すが近

蘭林齋画



清詩こゝろ行る同るの続なり

○芭蕉七部集の内その日集を注解せゝ書出せり是を見るよ生このゐ

有明のこゝ水よ酒屋はこゝ歩て

さけやゝこゝをさうやゝと酒店酒場ゐゞゝ見遠てゝ此屋のなハ家屋のやなゝゞ山やのなゝ山やのなゝ

をん生このゝ大半ゝとゐすこのゝ小茶を酒ひゝてゝこゝと

酒店ゝ見ゝだすこのゝ小茶なゝ友達ゝ年ゝゝ来るゝ此年ゝ

此つなのやゝん生こゝらゝなゝゝゝすゝゝ二遍ゝ酒店ゝ見ゝ一篇ゝ的

ゝる見ゝ侯ゐゝ有明のゝ水をいゝゝゝはゝゝゝ解なゝ生有明

のゝゝゝゝゝ清冥の清浸物加波ゝ花ゝ或ゝ仕栄の加変ゐゞゝ対

ゝて後ゝ浮る者なゝ物加波の花ゝ今ゝゝゝゝゝゝゝ一

首の尚ゝゝゝゝゝゝゝ孫ゝ姓ゝ物ゝゝゝ称せゝゝ後の人ゝ

有明のゝ水をゝゝゝゝゝ同なゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

たゝゝ清ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

酒家ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

濂さうしに所よりて行ふ所ら
比解よさうしにてさらぐしに照応しい〻て按どらよ神代卷よ
天の去賢ホしまそ成初とべて小賢ふぐ〻物語よ来れて
今世学法といえるしぐて注ぎでとと不及しふと又
さぐしにて漁沮のまて漢滅しに小家ぐらなる住居の
口さぐふ〻小賢さていなるとや嗚呼よ人の諸〻より一士乃
洋〻と為るなるものを
○七とふ湯石変の数ふして不盡〻〻一帰に易の地雷復
の数なり今の三十二字をて紀てう盡三七廿一字紀るを
一と述て三と画む天の数して大極の一紀統より素盤の日乃

三百六十一を將奏の八十一を一て紀ら体でなるとと知るべし 肯
或佛方の家司なる人試筆の今詠てなりしに卿法師どふ
しのとはみそ〻小年もてしたそ〻ふらふ〻むのを
詩のかも成嫁わ〻くてたるいま方此紀と知りて詠しや又
ちしぐてよみしやしも尊巌変うり也ふち男男〻ふね有
ふとん若なりしだ方社わ〻わいしくと知ぐぐり知〻ぐ
芸教ぐてしものとろ此秋家の大事を偶中ゆと詠しとのか
也ぐ手後ら不氏拾亜家のよなりもぐでから今使よなどしれど
そぐよ是とう動尚なりとと紀を〻れ知ろう動乱を医と
うや　○奏盤の写の山梔子敢なるを助云といまし也る所

以なりしはうれて生数卵那代酔ふ盤の裏面の切ふ放は
血漏して勅云せし者の首を切てとゆる処ろとい〳〵を
○大雅堂と称ふ者と空しうせね士なり侍いは官の人と云士をはぐる人と云生涯
ふ洮潛のかゐ〳〵云ものの二云ものを生ぐりね紀年の毛は歳旦ふ
いとゆしとやと問ひて汗ふ明のを
此短冊永阪乃儒家流氏の家流なり別て年の反に月十二旨
物故せし〳〵も寿也又那に游学のとれよ師と
菖粉晒しとみまてそふれ来うふ
〳〵云て当門ふら保ど幼る人とふ
○茶と五味と茶ひり故ふ衆人生涯とれふ絶実臣何ど五味

清苦なりしいとんや夫茶〳〵水と和して制をれど酒ふ
辛熟〳〵して人として辟程せしふ紙肥満せし酢ふ制とるはい
剛さをとでに茶をちひ人と渡ず是醴ふせどとく緩是長幼を
苦ひ粥〳〵ふせど鹹して腥ちと鹵窄〳〵ひ物とで苦味〳〵
況ども渤〳〵する苦味唐渡と桃次力を〳〵ふ〳〵味を〳〵ふ
で効とまて〳〵を〳〵ふ〳〵べ〳〵それ茶の号〳〵を〳〵ふ〳〵味
の〳〵なり故ふ始煕酒ふ〳〵ひ〳〵ふ〳〵ぶ〳〵ふ〳〵れを茶効れの〳〵ふ
び和ふ然と求ひ採茶局ふ注せく割截せ〳〵ひ行んぞや
○唐唐とは名世古ふ〳〵ひを筑紫ふ〳〵流沙朱ふ〳〵流絶
ふ洋なり〳〵ひ海い〳〵ぶ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵

然ども初筆栄ちて流行らしいへども壹岐の州肥後の天草
此後の筆へ肥前の大村領なども首より疫癘とちゝび絶と
いへども近邇伊勢尾張ども疫癘流行とる事
よ行合とれば支よ感じて疫を病なり九有しれば同行の連
これと思ひて防禦よ行給行しれ病者後者を求深養をる之
頻後合塗の者しいへども拾人半ち行し殘者ち稀なれど
猶て國よゆるしれば合塗よりう濃村よ傳染しこ家しれば国中
よ流行と絶ものを容易疫根絶がゝ大よ防しなりが頻
後壹州の同九と次後ち見ち延なり是胎毒よ依や先天
の懲火ようるや他國の水ちよ感せし者國中に充ち行べやや

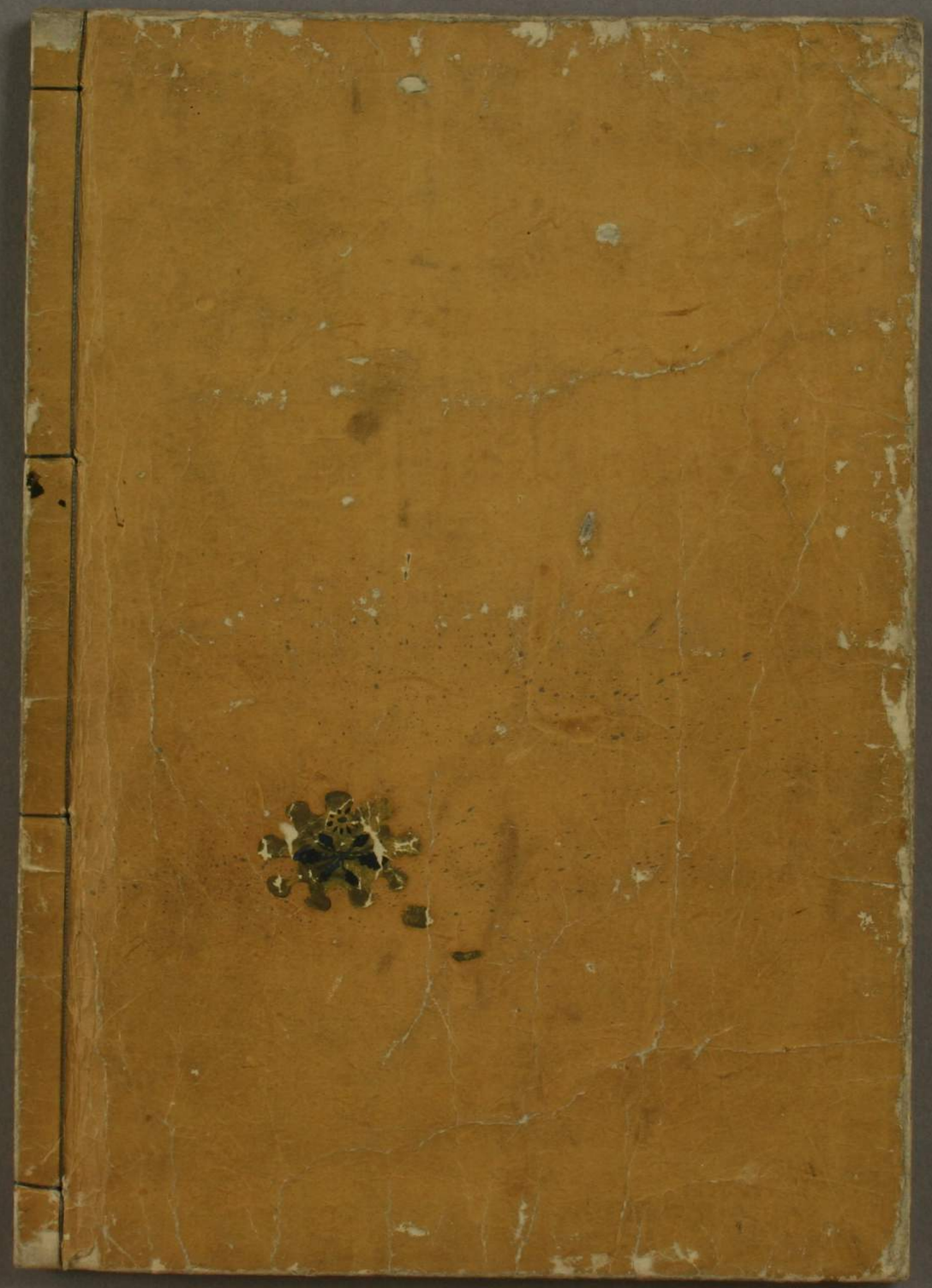
ま所よ於く一國一鄉疫を初ぶる行べや謝氏の説も又眞なり
痘瘡乃造化之殺撥児童之刼數非可以常理測
也治智之論但云胎毒之所致故者謂成胎以後
勿復再幸者有謂初生之時探取其口中血者有
謂懷胎十月勿食醴厚菓煿滋味者至於燒脉煉
砂充血稀豆渚方言人人殊及其試之百無一驗
況有同母共胎孵生者而稠稀迥若天壤又有一
時氣運吉凶不同倘遇艾吉比屋皆安若除艾凶
矢札如麻至有一村中無復児声者此蓋長平坑
卒南陽貴人之比而禄命医藥至此不足憑矣

○左傳云晉の畢萬首を刎て功有て魏邑を封ぜられ姓を魏と称ふ太ト令の曰萬が後うまれ大ならん夫魏は大也萬は数の至る所なり是今の世ヲフトマニのいちくもとのなり故畢萬が後果して文侯に代りむて魏の侯爵を記せり名を実は賓なり國家將記必有祥焉云々宜式

東牖子卷五大尾

諸物の初あらを地〻聖人多之
之也今〻之則不能世〻也四
仲宣世編其志也蓋薄物初
所乎〻人其所為〻〻概
見也屬事物刊之而需余
〻〻言余曰人いぬ面本之

已則雖未能無疎孫言異然
要於不舍之薄物細故者以而
謂同志矣道以新言頒卷尾
而應其需云
文政戊申秋日 蓮菜隆 識

東牖子 續篇 五冊 追出

享和元年四月
官許
享和三年正月成刻 山本宇右衛門 彩勒
山本町
山脇清五郎
心齋橋通
大野木市兵衛
攝都書局